

『枕草子』の「雨」についての覚書

——「心ときめきするもの」について——

緒言

『枕草子』では「雨」は好まれないものとする理解が一般的かもしれない。一段深め「雨」について嫌悪と美点の両面を描く『枕草子』の審美眼を積極的に評価する見解もある。本稿でも「雨」についての単なる好悪の論評ではなく、「雨」を契機として展開する話題を選択する美意識に着目し、物語とは異なる不定の時間が具象化される様相を把握しつつ、『枕草子』類聚的章段において雨に触発されて生ずる心ときめきするものの素描の特質を考察したい。

一

『枕草子』では「いたう」4例「いみじう」2例「かきくらし」2例「騒がしき」1例「夜一夜降り明かし」1例など、はなはだしく「雨」が降る場合が多く描かれる。「雨」により様々な行事が中止・縮小になる、あるいは外出できないなどの理由で清少納言に「雨は、心もなきものと、思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。」（成信の中將は）の章段277段）と述べさせるのであろう。「降るものは」の章段235段でも「雪」は無条件に挙げられるが、「雨」は嫌われたのか、挙げられていない。次の「雪は 檜皮葺、いとめでたし。」の章段236段でも「時雨」にわずかに言及している程度である。

一方で初段の夏「雨など降るも、をかし。」という感想も見逃せないが、それとは別に『枕草子』には「雨の音」について、あるいは「雨」を契機としてそれに関わる事物・心象について鮮やかに描かれた章段があることに注目したい。

心ときめきするもの 雀の子飼。ちこ遊ばする所の前わたる。よき薫物たきて、ひとり臥したる。唐鏡のすこし暗き見たる。よき男の、車とどめて、案内し問はせたる。頭洗ひ、化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人

渡 辺 仁 史

なき所にも、心のうちは、なほいとをかし。待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふと驚かる。（心ときめきするもの」の章段26段）
過ぎにしかた恋しきもの 枯れたる葵。雛遊びの調度。二藍、葡萄染などのさいでの、押しへされて、草子の中などにありける、見つけたる。また、をりからあはれなりし人の文、雨など降りつれづれなる日、さがし出でたる。去年のかはほり。（過ぎにしかた恋しきもの」の章段27段）

これら二段は清少納言の美意識にかなうささやかな身辺の事物・心象が描かれる対照的な類聚的章段である。26段はたとえ一つの要素でもそれが想起の中で具象化すれば小さな物語に展開してゆくことを予想させるような不定の時間での行為・有様を描く。27段は過ぎ去った行事・行為などの記憶を呼びさますもの、懐かしい交流など、ふさぐ心を解き放ち、現在において印象に残った過去の出来事をほのかに追想させるものを見出そうとする章段である。今にも動き出しそうな可能態としての不定の時間による表現と、過去の出来事を想起の中で引き寄せ始発と現在の意識の隔たりを見出そうとする時間の表現とを合わせると『枕草子』類聚的章段の時間の形姿を窺うことができるのではないであろうか。

27段に見られる雨による「つれづれ」は77段、78段、95段、134段にも描かれる。

雨いたう降りてつれづれなりとて、殿上人、上の御局に召して御遊びあり。（御仏名のまたの日」の章段77段）

二月つごもり方、いみじう雨降りてつれづれなるに、御物忌に籠りて（頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて」の章段78段）

朔日より雨がちに曇り過ぐす。つれづれなるを、「郭公の声、尋ねに行かばや」と言ふを我も我もと出で立つ。（五月の御精進のほど」の章段95段）

つれづれなるもの 所去りたる物忌。馬下りぬ双六。除目に司得ぬ人の家。雨

うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。(「つれづれなるもの」の章段 134段)

雨に降りこめられ、心の動き・変化に乏しい時間、心ふさぐ折のことを言うのであろう。雨の「つれづれ」は平安時代の仮名文芸作品、例えば『源氏物語』『帚木』巻のいわゆる「雨夜の品定め」冒頭に

つれづれと降り暮らししめやかなるよひの雨に、殿上にもおさおさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心ちするに、大殿油近くて文どもなど見給。近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかし

がれば(『源氏物語』『帚木』巻1-33)

と描かれるように、人同士の接近、物語の発端となる契機としてもしばしば利用される。同様に前掲27段のように「をりからあはれなりし人の文」を見つけ出し「つれづれ」な状態から愉しかったことへの想起へと大きく心が傾くこともある。それもまた話の継起的展開の契機となりうるであろう。類聚的章段においても描かれた個々の事物には固有の過去がある。読書の名残である「さいで」や昨夏の記憶を引き寄せる品「去年のかはほり」も時間が止まったままの状態でもたらされたものたちであろう。「枯れたる葵」が想起させる過ぎし日の葵祭の華やぎは言うまでもない。

また、「御仏名のまたの日」の章段77段のように「雨いたう降りてつれづれなり」とて、殿上人、上の御局に召して御遊びあり。」という風雅もある。「御遊」、すなわち管弦は雨に降りこめられたときの室内での格好の遊びである。心も澄みのぼるような晴れの日の楽の音に対して、しめじめとした趣であろうか。「たとしへなきもの」の章段68段に「雨の日」と「照る日」が「たとしへなきもの」とされるように、晴れた日と異なり、雨の折はむしろ揺らぎを持つ雨の音とともに心の内に向かい、過ぎ去る時間の内に覆い隠されてしまう何かを再び見出そうとする機会ともなる。一方、生動する心は好ましい事物や体感としての快さによって生じるばかりではなく、雨音、風の吹く夜の心張りつめた折などにも表現される。自らの内面を見つめているうちに、訪れる雨・風の音が人を待つ心に潜んでいた様々な期待や不安にふと気づかせてくれる。その冀うところもやはり心のときめきにつながる。

また、季節の変わり目などに雨風が季節の移ろいを感じさせてくれる場合もある。風は 嵐。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる雨風。八、九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚横さまに、騒がしう吹きたるに、

夏とほしたる綿衣のかかりたるを、生絹のひとへ衣重ねて着たるも、いとをかし。この生絹だに、いと所狭く暑かはしく、取り捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにかと思ふも、をかし。(「風は 嵐」の章段190段)

「生絹」への受け止め方の季節による推移によって「いつのほどに」という時の移ろいへの感慨をあらためて抱く。「七月ばかりに」の章段41段の「七月ばかりに、風いたう吹きて、雨など騒がしき日」に夏の間暑さで手放せなかった「扇」のこともいつの間にか忘れ、「綿衣の薄き」を着て昼寝するのもそれと同様である。

二

「心ときめきするもの」の章段に関わり『枕草子』における「心ときめき」・「心ときめきす」のすべての用例を列挙する。

一夜のことや言はむと、心ときめきしつれど、「いま、静かに、御局にさぶらはむ」とて去ぬれば、帰りまゐりたるに(「大進生昌が家に」の章段 5段 24p)

これはかならずさるべき使と思ひ、心ときめきして行きたるは、ことにすまじきぞかし。(「すさまじきもの」の章段 22段 41)

心ときめきするもの(「心ときめきするもの」の章段 26段 41)

枕上なる扇、わが持たるしておよびてかき寄するが、あまり近う寄り来るにやと、心ときめきして、引きぞ下らるる。(「七月ばかり、いみじう暑ければ」の章段 33段 58)

あやしう、いをの物語なりや、とて、見れば、青き薄様に、いとよげに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。蘭省花時錦帳下 と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを(「頭の中將の、すずるなるそら言を聞きて」の章段 78段 92)

局は、引きもやあけたまはむと、心ときめきしてわづらはしければ、梅壺の東面の半部上げて、「ここに」と言へば、めでたくてぞ、歩み出でたまへる。(「返る年の二月廿日、宮の」の章段 79段 97)

行幸は、めでたきものの、君達、車などの好ましく乗りこぼれて、上下走らせなどするがなきぞ、くちをしき。さやうなる車の、押し分けて立ちなどするこそ、心ときめきはすれ。(「見物は、臨時の祭。行幸。祭の帰さ。御賀茂詣で。」の章段 208段 90)

皆乗り果てぬれば、引き出でて、二条の大路に榻にかけて、物見車のやうに立てならべたる、いとをかし。人も、さ見るらむかしと、心ときめきせらる。(「関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切経供養せさせたまふに」の章段 263段 134)

これらについては、対人関係、多くは女性の対男性についてのものであると指摘されている。中でも「七月ばかり、いみじう暑ければ」の章段33段はこれ自体、一つの独立した後朝の挿話となっている。

ちなみに同時期の『うつほ物語』の「心ときめき」・「心ときめきす」の用例は次のおりであり、恋とはあまり関係がない。

大宮「承る時もあれど、さるべきにも侍らざれば、心ときめきに思ひはべりつるに」。(「菊の宴」巻2―54)

「かく承らましかば、この侍る人にも、重き御服をこそ着せはべるべかりけれ。心ときめきのやうなれども」とて、濃き鈍色の御衣一襲、黒椽の御小桂うち出でて見せたてまつりたまへり。(「国譲中」巻3―144)

尚侍「あな聞きにくや。翁をば誰か許さぬ。心ときめきなりや」とのたまうほどに、父おとどを見つけて、手捧げてはひ出づれば(「国譲中」巻3―196) 宮見たまひて、いとうれしと思さる。「あやしの心ときめきや」とてうち置きたまひつ。(「楼の上下」巻3―513)

一方の『源氏物語』の「心ときめき」・「心ときめきす」の用例は次のとおりである。用例が多く煩瑣ではあるがあえてすべて掲げる。

やむごとくわづらはしきものにおぼえたまへりし大殿の君も亡せ給ひてのち、さりととも、世人も聞こえあつかい、宮のうちにも心ときめきせしを、そののちしもかき絶え、あさましき御もてなしを見給に、まことにうしとおぼす事こそありけめ、と知り果て給ぬれば、よろづのあはれをおぼし捨てて、ひたみちに出で立ち給。(「賢木」巻1―42)

心ばへなどもものはかなく見えし人の生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、猶すべて定めなき世なり、とおぼすに、ものあはれなる御けしきを、心ときめきに思ひて若やぐ。(「朝顔」巻2―263)

あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顕証にはしたなきさまにはえもてなし給はぬも、見知り給へるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたくふけゆ

くを、うちには人目いとかたはらいたくおぼえ給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば、おとこ君、ことほりとは返返思へど、なをいとうらめしくちおしきに(「宿木」巻5―85)

宮は、人のおはするほど、さばかりとをしはかり給ふが、すこしけ近きけはひするに、御心ときめきせられ給ひて、えならぬ羅のかたびらの隙より見入れ給へるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、おかしと見たまふ。(「蛭」巻2―430)

白き薄様につややかに書い給へれど、ことにおかしきところもなし。手はいときよげなり。才賢くなどぞものし給ひける。かむの君、世離れを何ともおぼされぬに、かく心ときめきし給へるを見も入れ給はねば、御返りなし。おとこ胸つぶれて、思くらし給。(「真木柱」巻3―123)

宰相もあはれなる夕べのけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と、人々のさはぐに、なをながめ入りてみ給へり。心ときめきに見たまふことやありけん、袖を引き寄せて(「藤裏葉」巻3―177) 御文には、

わがやどの藤の色こきたそかれにたづねやはこぬ春のなごりをげにいと面白き枝に付け給へり。待つげ給へるも心ときめきせられて、かしこまりきこえ給ふ。(「藤裏葉」巻3―178)

権中納言も、かかる事どもを聞き給ふに、人づてにもあらず、さばかりおもむけさせたまへりし御けしきを見たてまつりてしかば、をのづからたよりにつけて、漏らし聞こしめさるる事もあらば、よももて離れてはあらじかし、と心ときめきもしつべけれど。(「若菜上」巻3―221)

例の、世人は、匂ふ兵部卿、かほる中将と聞きにくく言ひつづけて、その比よきむすめおはするやうごとなき所々は、心ときめきに聞こえごちなどし給もあれば(「匂宮」巻4―220)

まことに言ひなきむと思ふところあるにや、とさすがに御心ときめきし給て、花の香をにはほす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめんなど、猶心解けずいらへ給へるを、心やましと思ひみ給へり。(「紅梅」巻4―242)

らぬすさびなめり」と、そそのかし給ふ時々、中の君ぞ聞こえ給。姫君は、かやうのことたはぶれにてももてはなれ給へる御心ふかさなり。(「椎本」巻4—345)

中納言は、ひとり臥し給へるを、心しけるにやとうれしくて、心ときめきし給に、やうやうあらざりけるりと見る。いますこしうつくしうたげなるけしきまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれまどひ給へるを、げに心も知らざりけると見ゆれば、いといとをしくもあり(「総角」巻4—405)

例は、これよりたてまつる御返りをだに、つつましげに思ほして、はかばかしくもつづけ給はぬを、「身づから」とさへのたまへるがめづらしくうれしきに、心ときめきもしぬべし。(「宿木」巻5—63)

雨すこしうちそそくに、風はいと冷やかに吹き入りて、言ひ知らずかほりくれば、かうなりけりと、たれもたれも心ときめきしぬべき御けはひおかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬほどなれば、心さはぎて、「いかなる事にかあらん」と言ひあへり。(「東屋」巻5—176)

笛の音さへ飽かずいとおぼえて、

ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬ

と、なまかたはなることを、「かくなん聞こえ給ふ」と言ふに、心ときめきして、

山の端に入るまで月をながめ見んねやの板間もしるしありやと

など言ふに、この大尼君、笛の音をほのかに聞きつけたりければ、さすがにめで出で来たり。(「手習」巻5—352)

『うつほ物語』の「心ときめき」は不安・動転などの意味がむしろ前面に出ることが多い。『源氏物語』の場合、物語の時間はすでに流れ始めており、「心ときめき」には恋の展開に関わる事柄がほとんどであるが、語義的に期待と不安の綱交ぜという点で『枕草子』と共通している。これまでの指摘⁽⁴⁾と異なり、これらの多くの用例に圍繞されながら『枕草子』はその最も純粹な事物・心象を「心ときめきするもの」の章段26段として簡潔な筆致で選び取っていることを確認したい。「雨の音」もその一つであった。

薫物の香を装束に纏い、心満たされる思いもそうであるが、『枕草子』のいずれの場合も重要なのは日常の中で出会う、心ふるえるように繊細な自己の内の充足感である。不定の時間として表現されていながら、それらは何かのはずみによって言葉

による事物の想起の中で次々に具象化され、時間とともに展開してゆく一連の挿話へと向かう。分類・列挙にとどまることなく、『枕草子』の美意識は、事物が本来持つ時間による変容を受け入れ、断片的時間を「継ぎ」(「うれしきもの」の章段261段)、網状的な連関を再び取り戻し、意の赴くまま意味を探し当て紡いでゆく。その美意識は単に典型を並べて満足することなく、身体的・時間的な体感を言葉による想像力で身に纏うように意味化することを自らに求めている。

結語

物語のように事態や作中人物の心理の大きく多彩な変化に意義を求め、新奇・急展開をめざすのではなく、『枕草子』には移ろいを日常の中で細やかに感じ取る、作者の等身大の感受性が見出される。大きな物語、伸び広がる長大な時間ではない、個々の生の断片的時間の集積、それらにも多様な、時には見過ごしかねない、日常という生きられる時間がちりばめられていることに思いをいたすべきなのである。時間の重々しい連続性、容易に断ち難い線状性にあえて重きを置かない『枕草子』の軽やかさ・自在さに独自性を見出すとはそのような意味においてのことなのではないであろうか。

『枕草子』の引用はすべて石田穰二訳注『枕草子』上・下巻 角川ソフィア文庫 昭和54・8、昭和55・4に拠った。

『うつほ物語』の引用はすべて中野幸一校注・訳 新編日本古典文学全集『うつほ物語』(一)〜(三) 小学館 平成11・6〜平成14・8に拠った。

『源氏物語』の引用はすべて柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注 新日本古典文学大系『源氏物語』(一)〜(五) 岩波書店 平成5・1〜平成9・3に拠り、一部表記を改めた。

注

- (1) 村井順「雨について」『枕草子その自然』笠間書院 昭和50・8
- (2) 田中重太郎『枕草子全注釈』(一) 角川書店 昭和47・12
- (3) (2)に同じ
- (4) (2)に同じ

(二〇一七年九月二〇日受理)